

ジェンダーの視点から考える大戦史

生活環境科学系・生活文化学領域

林田 敏子

教授

HAYASIDA Toshiko

博士(文学)(奈良女子大学)



■研究キーワード ジェンダー / 歴史学 / イギリス史 / 大戦史

■主な所属学会 日本西洋史学会 / ジェンダー史学会 / 日本ジェンダー学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.df2ea3691f9877d9520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

銃後の世界を広く巻き込む総力戦となった二つの世界大戦に焦点をあて、戦争とジェンダーの関係について研究しています。とりわけ、「男の聖域」である軍隊における女性兵士の存在が、軍隊だけでなく戦争そのものをいかにジェンダー化したのか、また、戦争を正当化し、これを支持する世論をいかに創出したのかという問題に取り組んでいます。

大戦のジェンダー史研究が対象にするのは女性だけではありません。男性もまた、戦時に強化される「男らしさ」の価値観を内面化しながら軍隊に組み込まれました。軍事技術の飛躍的発展によって無力化した兵士が直面した「男らしさ」喪失の危機(負傷、投降、脱走)も重要なテーマです。さらに、前線からもっとも遠い場所に位置した主婦もまた、キッチンという「戦場」で戦う兵士とみなされました。主婦向けの料理本や雑誌、ラジオ番組の分析を通して、主婦たちが戦争への「参画」を通じて市民としての意識をいかに育み、それが戦後の社会にどのような影響を与えたのかを考えています。

空軍女性部隊の募集ポスター(1943年) 主婦向けのプロパガンダ・ポスター(1918年)



©IWM (Art.IWM PST 8124)



© IWM (Art.IWM PST 12505)

お問い合わせ：奈良女子大学社会連携センター

Tel:0742-20-3734

Mail:liaison@cc.nara-wu.ac.jp

アピールポイント

1. ジェンダーの視点から見る軍隊

本研究の特徴の一つは、軍隊を単なる戦闘集団としてではなく、ジェンダー規範が交差する社会的空間として捉える点にあります。ジェンダー問題は戦争という非常時にこそ顕在化します。とりわけ女性兵士というマイノリティに焦点をあてることで、男の領域に「侵入」した女性に対する社会の反発や軍隊内におけるジェンダー秩序の再編過程に関心を寄せています。このような視点は、単に戦争の歴史を記述するだけでなく、社会全体のジェンダー構造の変化を読み解く上で重要な意味を持っています。

2. 「記憶」から読み解く大戦史

現代に至る「長い戦後」という時空間の中で、大戦の歴史はつくり、そして変容してきました。たとえば戦争博物館における展示からは、戦争が単なる歴史的事実としてではなく、政治的・文化的にどのように利用されてきたのかを分析することができます。戦争を記憶し、それを歴史化する「場」は、記念碑や博物館といった公的な空間だけにとどまりません。戦争体験者の手記やインタビュー記録といったエゴ・ドキュメント(一人称の語り)も貴重な史料となります。

3. 戦争 / 軍隊とセクシュアリティ

ジェンダーと密接な関わりをもつセクシュアリティへの着目も本研究の特徴の一つです。男性の出征によってジェンダー秩序の揺らぎが社会問題化した大戦期には、女性の「性」が徹底的に管理されました。また、軍のモラルを維持する上で、男女を問わず同性愛の問題が深刻化した時期でもあります。当時の軍隊がこの問題にどう対処したのかを、軍の内部史料や裁判記録、兵士の手記などを用いて分析しています。

更新日：2025年1月1日